

## マダコ種苗生産の概要

### 1 種苗生産技術開発に取り組む経緯

- (1) マダコは兵庫県の瀬戸内海では古くから漁獲量が多く、夏を代表とする水産物として有名であるが、貧栄養化の影響などから漁獲量の減少が続いており、資源増大の対策が求められている。
- (2) マダコの種苗生産は、1960年代に本県が日本で初めて種苗生産に成功したものの、浮遊後期の大型餌料の大量確保の課題が解決できず量産化に至らなかった。
- (3) 近年の国立研究開発法人水産研究・教育機構や岡山県の研究で、水流装置の開発や初期餌料へのガザミの幼生（ゾエア）の利用などで生残率が向上するなど、放流の目安となる「着底稚ダコ」の量産に繋がる新たな知見が得られた。
- (4) そこで県では、ガザミの放流種苗を生産している（公財）ひょうご豊かな海づくり協会と協力し、令和5年度からマダコ種苗の生産技術開発に取り組み、本格的な種苗放流の実施を目指している。

### 2 これまでの成果等

#### (1) 令和5年度（1年目）の成果

- ア 6月末に岡山県水産研究所から孵化幼生5,000匹の提供を受け、飼育開始。
- イ 7月末に着底稚ダコを取り上げ、約2,300匹の飼育に成功。しかしその後、予見していた共食いにより日齢55日目には320匹となり、1回目の試験を終了。
- ウ 2回目の試験で、8月中旬に孵化幼生約50,000個体を収容したが日齢7日程度で大量斃死。原因は不明だが、高水温(27-29℃)の影響と推測。
- エ 3回目の試験で、10月～11月にかけて孵化幼生計2,000個体を収容。秋に確保できないガザミ幼生に代わる餌料の選定を試みたが、有効な代替餌料を見つげられず、着底稚ダコを生産に至らなかった。

#### (2) 令和6年度（2年目）の進捗

- ア 6月末に県内産親ダコの卵から孵化幼生17,000匹を収容し、飼育開始。
- イ 7月末に着底稚ダコを取り上げし、約12,000匹の生残を確認。
- ウ 8月5日に約2,000匹を放流し、残りは生残率向上に向け飼育試験を継続。

### 3 今後の課題

#### (1) 生産技術の安定化、効率化

大型水槽を用いた飼育や飼育装置の改良等、生産技術の開発・改良に取り組み、種苗の生残率の向上や生産の効率化を図る。

#### (2) 放流適地の検討

稚ダコの分布場所や生育環境等を調査し、放流に適した場所や条件等を検討することで効果的な放流に取り組む。

#### (3) 遊漁者等の一般県民と連携した放流の実施

マダコは遊漁の対象としても人気が高く、県内の一部地域では遊漁者も参加した資源管理の取組が行われており、遊漁者等一般県民も参加した種苗放流の実施と資源管理の意識醸成を図る。

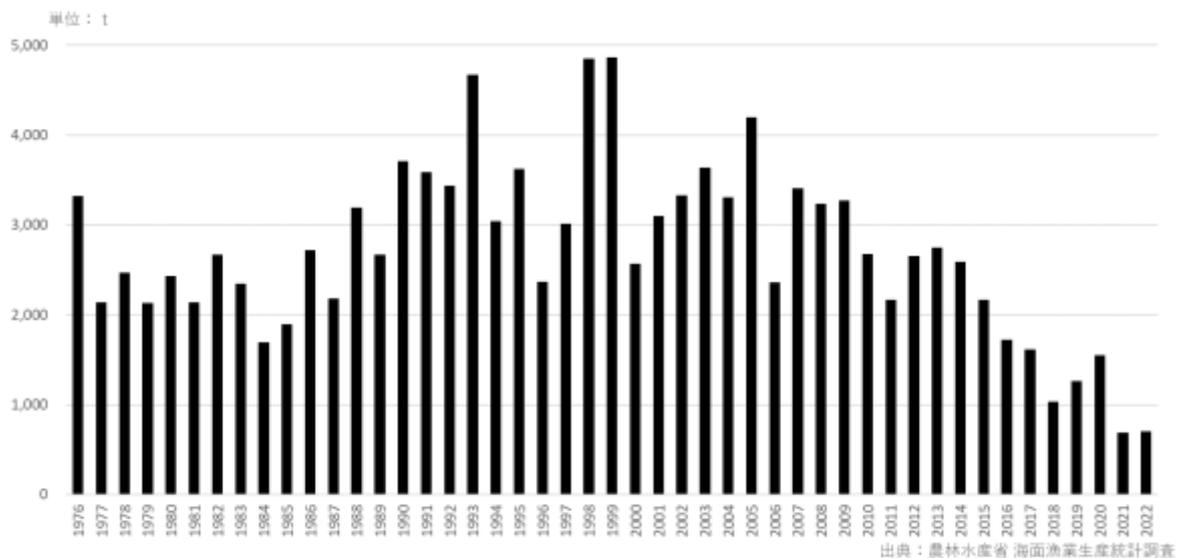
## 【参考】

### 1 事業目標

指標名	R5	R6	R7	R8	R9	最終目標
着底稚ダコ※ 生産数	1 千匹	5 千匹	25 千匹	—		25 千匹 【R7 年度】
マダコ種苗 放流数	—		10 千匹	20 千匹	100 千匹	100 千匹 【R9 年度】

※浮遊生活を終えた約 30 日齢の稚ダコ

### 2 本県瀬戸内海海域におけるタコ類の漁獲量(トン) (海面漁業生産統計調査)



### 3 マダコの成長過程

#### 【令和 5 年度技術開発における稚ダコの成長の様子】



卵を管理する親ダコ

浮遊生活を送る幼生

着底直後の稚ダコ

孵化 68 日目の稚ダコ

### 4 明石市地先における資源管理等の取組

産卵用タコつぼの投入や抱卵ダコの再放流といった資源保護、海底耕うんや有機肥料を用いた栄養塩供給といった生息環境改善の取組を実施。

また、遊漁によるタコの採捕も漁獲量の減少要因とも考えられることから、「明石市沿岸のタコ釣りルール」を設けるなど、遊漁者とも調整を図りながら管理に取り組んでいる。

#### 【明石市沿岸のタコ釣りルール】

[https://www.hyogo-suigi.jp/fishing/wp-](https://www.hyogo-suigi.jp/fishing/wp-content/uploads/sites/4/2024/01/141013ce3ed9fa5c206a421dc4c011bb-6.pdf)

[content/uploads/sites/4/2024/01/141013ce3ed9fa5c206a421dc4c011bb-6.pdf](https://www.hyogo-suigi.jp/fishing/wp-content/uploads/sites/4/2024/01/141013ce3ed9fa5c206a421dc4c011bb-6.pdf)